

## 平成23年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること)

脳卒中後遺症者の回復期病棟入院中の心理的要因と身体機能・ADL・QOLの関係

学位の種類: 修士(作業療法学)

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 作業療法科学域  
学修番号 10896607

氏名: 西川俊永

(指導教員名: 藺牟田洋美准教授)

注: 1,000字程度(欧文の場合300ワード程度)で、本様式1枚(A4版)に収めること。

**目的** 回復期リハビリテーション病棟に入院している脳卒中後遺症者の心理面である自己効力感や統制感と身体面の身体機能・ADL・QOLについて、入院中の後遺症者の心理面と身体面の変化および関係について検証することである。

**対象および方法** 対象はB病院回復期リハビリテーション病棟に入院した脳卒中後遺症者16名(平均年齢69.69±13.01歳)であった。測定材料は以下の通りである。自己効力感は転倒関連自己効力感尺度および健康管理自己効力感尺度、統制感はHealth Locus of Control尺度、QOLはSF-8を使用し、身体機能は脳卒中機能評価セット(SIAS)、ADLはFunctional Independence Assessment(FIM)を使用した。研究デザインは入院時・退院時に測定材料の測定をおこなった。

**結果** 入退院時の比較で身体機能・ADL・QOLは有意に改善し、同時に心理面の転倒関連自己効力感や統制感も改善した。しかし健康管理自己効力感は改善しなかった。転倒関連自己効力感とFIMは入退院時の両時期に有意な正の相関関係が認められ、ADLへの自己効力感と実際にできる能力がほぼ一致した結果となった。QOLの入退院時の変化と自己効力感・統制感の変化の間に正の相関関係が認められ、一方でFIM変化の間には有意な相関関係が認められなかった。また、先行研究を参考に統制感の39点を基準とし内的統制感と外的統制感で対象者を分類したところ、①内的統制感が強く自己効力感とADLが改善した群、外的統制群では2群に分かれ、②外的統制感が強く自己効力感とADLが低い群、③外的統制感が強くADLは向上したがQOLが大きく改善しなかった群の合計3群に分類された。

**考察** 入退院時の比較で身体機能・ADL・QOLが改善すると同時に自己効力感や統制感の改善も認められた。QOLの変化と自己効力感・統制感の正の相関関係の結果からQOLの改善にはADL変化だけでなく自己効力感や統制感など心理面の変化を考慮する必要性が示唆された。統制感を基準にADL・QOL・心理変数の変化から対象者を3群に分類した。特に③群はADLが向上したにもかかわらずQOLは改善せず、QOL改善のためADL以外の援助が必要であると思われた。